

# 「ベツレヘム」の秘密



## ベレーシート

●イエシュアの誕生の出来事は神の永遠のご計画においてきわめて重要な出来事ですが、空知太栄光キリスト教会では、10年程前から「クリスマス」の催しをしなくなりました。「教会でもクリスマスするんですか」というご時勢に、「本当のクリスマスは教会で」とかんでみても空しく響きます。なぜなら、クリスマスの季節には宗教の霊が強く働いているからです。この世のクリスマスの流れに流されないためには、むしろ教会がクリスマスをしないことが得策だと考えます。「教会なのに、なぜクリスマスを祝わないんですか」と言われる方がむしろ良いのですが、そのような質問をこれまで受けたことがありません。クリスマスのポイントは、神の下さるプレゼントであるイエシュアにある「永遠のいのち」を受け取ることで、自分の欲しいものをプレゼントしてもらうことではありません。クリスマスにまつわるさまざまなイベントを行うことよりも、イエシュアの誕生にまつわる出来事をじっくりと学ぶことのほうが重要です。

●そこで今回は、イエシュアの誕生の出来事の中でイエシュアが生まれた「ベツレヘム」という町にスポットを当ててみたいと思います。というのは、イエシュアの誕生の出来事は「ベツレヘム」という町を中心にして様々なことが密接につながっているからです。「なぜイエシュアはベツレヘムで生まれたのか」、「なぜイエシュアはベツレヘムで生まれなければならなかったのか」という必然性を問うことによって、神のドラマには計り知れない知恵の深さをもって多くの事柄が緻密なつながりをもっているのです。



## 1. ヘブル語が意味する「ベツレヘム」

### (1) 「食べる」を意味する動詞の「ラーハム」(לָחַם)

●「ベツレヘム」は、ヘブル語で「パンの家」という意味です。「ベート」(בֵּית)は「家」を意味し、「レヘム」(לֶחֶם)は「パン」を意味しています。ということは、そこが昔から小麦や大麦などの穀物の産地だったことが分かりますが、ベツレヘムにはより深い意味が隠されています。「糧、パン、食物」を意味する名詞の「レヘム」(לֶחֶם)、その動詞は「ラーハム」(לָחַם)で「食べる」ことを意味します。それ以上の頻度で動詞の「ラーハム」は「戦



う、攻撃する」という意味として使われています。その使用頻度は6回、その名詞の「糧」「レヘム」(לֶחֶם)で298回。「あなたは、顔に汗を流して糧を得(る)」(創世記3:19)とあります。なぜ顔に汗を流して糧を得るのかといえば、それは、罪のゆえに土地がのろわれて、荒地の象徴である「いばらとあざみ」が生えるようになり、それゆえに、「いばらとあざみ」と戦って糧を得るための苦しい戦いを余儀なくされてしまったからです。しかし神は、神の民が主を信頼する時に、必要な「糧」(マナ)が天から与えられることを荒野の経験を通して教えられました。死ぬことのない生存の保障は主を信頼することによって必ず与えられるという真理です。

●新約で最初にこのことばが登場するのはマタイの福音書4章3~4節です。「パン」にかかわるサタンとの戦いの場面です。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書4章3~4節

3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」

4 イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」

●イエシュアが言われた人が真に生きるために必要なパンとは、食べる食糧としてのパン(bread)ではなく、神の口から出る一つ一つのことばを意味しています。この意味において、主の祈りの中にある「日ごとの糧」について考えなければなりません。もし、この「日ごとの糧」のことを、毎日食するパンのことだと思えば、イエシュアが言おうとすることをまったく理解していないことになります。四つの福音書がみな共通に記している「五千人の給食」の奇蹟は、イエシュアこそ「天から下って来た生けるパン」であることを示唆するものでした。イエシュアは「わたしがいのちのパンです。」(ヨハネ6:35)、「わたしは、天から下って来た生けるパンです。」(同6:51)と言われました。また「それを食べると死ぬことがない。・・永遠に生きています。」(同6:50, 51)とも言われました。さらにイエシュアは弟子たちに、「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」(同4:32)と言われました。しかし、弟子たちも、また多くの群衆もその真の意味することを悟ることができませんでした。これは今日においても然りです。「いのちのパンを与えることのできる方」が生まれた場所が「パンの家」、すなわち「ベツレヘム」です。

## (2) 「戦う」を意味する動詞の「ラーハム」(לָחַם)

●動詞の「ラーハム」(לָחַם)は177回。その名詞の「戦い」は「ラーヘム」(לָחָם)で1回しか使われていません(士師記5:8)。重要なことは、「戦う」主体は主ご自身です。神の民は「つぶやくことなく」、主に信頼して「黙っていること(沈黙)」が求められました。生存と防衛の保障は主の主権的な御手の中にあることなのです。ですから、神の御子イエシュアは言われました。「何を食べるか、・・と言って心配するのはやめなさい。・・あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」(マタイ6:31~33)と約束されています。

- 以上、「ベツレヘム」が意味するところをヘブル語そのものから説明しましたが、神の歴史においても、「ベツレヘム」は神の救いのドラマにおいて多くの秘密が隠されている地なのです。

## 2. 皇帝アウグストの勅令

【新改訳改訂第3版】ルカの福音書 2章 1～7節

- 1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。
- 2 これは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった。
- 3 それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った。
- 4 ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。彼は、ダビデの家系であり血筋でもあったので、
- 5 身重になっているいなずけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった。
- 6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、
- 7 男子の初子を産んだ。

●最初の「問いかけ」は、イエシュアの誕生がなぜ皇帝アウグスト(アウグストゥス)の住民登録の勅令の時期であったのかということです。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」(伝道者の書 3:11)とするならば、イエシュアの誕生という出来事はまさにそうあってしかるべきです。イエシュアは、歴史的に意味のある時期に、しかも絶妙なタイミングで誕生しているのです。誕生それ自体が重要であって、それがいつであっても同じことだと考えているならば、ルカがここで伝えようとしているメッセージは見逃されてしまうかもしれません。ルカの福音書は「テオピロ」というローマの高官のために書かれたものであることを忘れてはなりません。つまり、彼は当時の世界を支配したローマの実情をよく知っている存在なのです。後で触れることになりますが、イエシュアの誕生の地は「ベツレヘム」であるということが旧約聖書のミカ書 5章 2節で預言されています(マタイ 2:4～6も参照)。イエシュアの両親はナザレで生活していましたが、預言によればメシヤはダビデの出生地であるベツレヘムで生まれなければならなかったのです。

### (1) 預言者ミカの預言

【新改訳改訂第3版】ミカ書 5章 2節、4節

- 2 ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。
- 4 彼は立って、【主】の力と、彼の神、【主】の御名の威光によって群れを飼い、彼らは安らかに住まう。  
今や、彼の威力が地の果てまで及ぶからだ。

●ミカの預言によれば、ベツレヘムの地が擬人化されて呼びかけられています。ちなみに、「エフラテ」とは「ベツレヘム」の別名です。ベツレヘムにきわめて近い場所にあります(ヤコブが愛する妻ラケルを葬った場所です)。ミカはイザヤと同時代に登場した預言者です。その預言は北イスラエル王国と南ユダ王国の両方に対して語られている点も重要です。ミカは、神が「ベツレヘム」という「ユダの氏族の最も小さな部族」から、「神ご自身のために」、しかもそれは「昔から、永遠の昔からの定め」だとしています。つまり、変更されることのない決定事項のご計画として、「ベツレヘム」が神のために、神によって選ばれているのです。その神の不変の選びのゆえにイエシュアはベツレヘムで生まれなければなりません。また、「ベツレヘム」はユダの氏族であるダビデが誕生した町でもあるのです。その系列からイエシュアが生まれたのです。

●しかし、そのことが歴史において目に見える形で現われたのは、「そのころ、全世界の住民登録をせよ」という勅令が、皇帝アウグストから出・・・」(ルカ 2:1)ということがなければ、決して実現することはなかったし、ヨセフとマリヤがナザレからベツレヘムに行くこともありませんでした。しかもナザレからベツレヘムまでの距離はなんと220キロにも及ぶ旅であったと言われています。ローマの最初の皇帝アウグストが発令した住民登録の命令は、神の主権的なご計画の中で、ナザレにいたヨセフとマリヤをベツレヘムへと移動させたのです。きわめて絶妙なタイミングです。すでにマリヤの胎の中にはイエシュアが聖霊によって宿っていました。少しでもタイミングがずれたならば、イエシュアはベツレヘムで月満ちて生まれることはなかったのです。まさに歴史の中に神がご介入された絶妙なタイミングでした。ですから、もし「**そのころ**」ということばがなかったとすれば、「昔々、あるところに」という昔話と何ら変わらないものになってしまいます。

## (2) 「そのころ」と言われる時代

●皇帝アウグストがローマ全土に(これを聖書は「全世界」と表現しています)住民登録を命じた時代は、事実上、ローマによる平和(ラテン語で「パクス・ロマーナ」Pax Romana)が実現していた時代です。つまり、それまでの共和制による派閥の争いの時代から平和の時代を迎えた時代なのです。なぜそのような平和な時代にイエシュアが誕生されたのでしょうか。そこには深い意味があります。ルカは実は巧みにその答えを伝えようとしているのです。

●「皇帝アウグスト」—これはローマの初代皇帝となった「オクタヴィアヌス」に対する尊称として与えられた呼称です。ローマ暦では皇帝の誕生月を新年としました。「オクタヴィアヌス」の誕生月は8月(Augustus)です。ですから彼のことを、「皇帝アウグスト(アウグストス)」と呼んだのです。彼の養父は、共和制ローマの末期に終身独裁官となったガイウス・ユリウス・カエサルでした。彼は自分が「終身独裁官」と宣言したために殺害されました。「ブルータス、お前もか。」という有名なことばは、このとき自分を裏切った親友に対して語ったカエサルのことばです。カエサルの後継者(実の子ではなく養子)としてローマの初代皇帝となったアウグストによって実現した「パクス・ロマーナ」(ローマによる平和)は、言うなれば、軍事的な力によって打ち立てられた平和でした。人々は、皇帝アウグストこそ共和制による覇権

争いのすべてを終わらせた「救い主」(ソーテリア)だと信じていました。ところが「**そのころ**」、もうひとりの「救い主」が「ダビデの町」、すなわち「ベツレヘム」に誕生した(ルカ 2:11)ことをルカは伝えようとしているのです。もうひとりの「救い主」とはイエシュア・メシヤ(イエス・キリスト)のことです。当時の人々は、「皇帝アウグスト」こそ、全世界のための「ソーテリア」(=救い主)だとして歓迎し、彼の統治こそ「エウアングリオン」(福音)の始まりだと考えていたのです。そうした背景こそルカ 2章 1節の「**そのころ**」ということばが意味していることです。

### (3) ルカは皇帝アウグストと幼子との対比を明確に意識しながら書いている

●したがって、ルカは当時の政治的・社会的な状況とイエシュアの誕生によってもたらされる出来事を対比する語彙を意識的に用いています。同じことばでも、使われる意味合いは全く異なっています。

語彙	皇帝アウグスト	幼子イエシュア
救い主	軍事力によって平和をもたらした救い主	十字架によって神との平和をもたらした救い主
主	皇帝は神を意味する「主」と呼ばれた	イエシュアは復活によって「主」(神)と呼ばれた
平和	力によって均衡を保っている平和	神の愛によって実現される平和
福音	皇帝アウグストスによる施政の福音	イエシュアの支配(御国)による福音
栄光	勅令を発し得る権威ある皇帝	御子を遣わされたいと高きところにおられる御父

### 3. 羊飼いたち「ミグダル・エーデル」(羊の群れの塔)

【新改訳改訂第3版】ルカの福音書 2章 8~12節

8 さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。

9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。

10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。

11 きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

12 あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」



●ルカの福音書によれば、イエシュアの誕生のニュースを最初に知らされたのは羊飼いたちでした。彼らは急いで「ベツレヘム」に行って生まれたばかりのイエシュアを見たのです。ここで登場する羊飼いたちの存在に神の秘密が隠されています。ルカは 2章 8節で、「さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた」と記しています。「この土地」とはいったいどんな土地なのでしょう。どこの場所なのでしょう。御使いの知らせを聞いた羊飼いたちは 2章 15節で「さあ、ベツレヘム

に行って、・・・この出来事を見て来よう。」と言っていますから、「この土地」というのはベツレヘムではないことが分かります。かといって、「急いで行って、・・・捜し当てた」とありますから、それほど遠く離れてはいない場所です。そもそも、羊飼いたちはどこにいたのでしょうか。これまでにそのようなことを私は考えたことがありませんでした。しかし、小さなことにこだわると、不思議と神の隠された秘密が見えてくるのです。

●創世記 35 章 21(16～21)節に「ミグダル・エーデル」(=羊の群れの塔) と呼ばれるところがあります。「ミグダル」(מִגְדָּל)は「塔、やぐら、とりで」を意味し、「エーデル」(עֵדֶל)は「家畜や羊の群れ」を意味します。つまり、「ミグダル・エーデル」とは「羊などの群れを管理する塔」のことです(右写真参照)。「ミグダル・エーデル」のあるこの地域(ベツレヘムの周辺)は、約束の地として与えられる前のヤコブの時代から、羊の世話をする場所として知られていたのです。救い主がお生まれになるという預言が与えられる前から、ベツレヘムは特別な場所として、神が確保されていた所なのです。



●イスラエルではエルサレム神殿で用いられるいけにえがささげられていましたが、そのいけにえとなる羊は「傷のない羊」でなければなりません。つまり、品質の良い、良く管理されて育てられた最高の羊が必要とされました。そうした羊を育てる場所がベツレヘム近郊にあったのです。やがてはエルサレムにおいて神殿が造られた、そこで礼拝するために多くの犠牲となる羊が必要でした。つまり、「ミグダル・エーデル」はそのようないけにえを供給する適所だったのです。

●ユダヤ人で新約学者であるイーダーシャイムという人は「イエスの生涯と時代」(The Life and Times of Jesus the Messiah)という本の中で、ベツレヘム郊外にあるミグダル・エーデル(見張りの塔)の傍の羊の群れは、普通の群ではなくて、エルサレムの神殿に捧げるための特別な群れであること、羊飼いたちも特別な使命のための人々で、しかも、年間休み無く羊を見守っていたことを指摘しています。また、普通の羊飼いは、夕方になると羊を囲いの中に入れて、自分たちは天幕の中で寝てしまうのが普通でした。夜に焚き火を焚きながら、野宿してまで羊を見守るということは尋常なことではなく、むしろ特別なことだったようです。「傷のない羊」を育てるために、品質管理を何よりも自分たちの使命とする忠実な羊飼いたったからこそ、「野宿で夜番をしながら羊の群れを見守って」(2:8)いることができたのです。

●「ベツレヘム」は山の上にあり、エルサレムとほぼ同じ海拔 760m です。温暖な地中海気候で、夏の平均気温は 23 度、冬でも 14 度とされています。現在も肥沃な土地であり、イチジク、ぶどう、オリーブなどが栽培されているようです。気候的には快適な場所のようで、私もそんなベツレヘムにのんびりと身を寄せてみたくなります。主の使いは、そのようなベツレヘム近郊にある「ミグダル・エーデル」にいる羊飼いたちのところに現われたのです。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけています。これが、あなたがたのためのしるしです。」(2:11)。この知らせを聞いた羊飼いたちは、急いでベ

ツレヘムに行き、自分たちをはるかに越えた偉大な羊飼い(大牧者であるメシヤ)となる方と対面したので。しかもその方は、やがて人類の罪の身代わりのいけにえとなるべき「傷なき小羊」でした。「ミグダル・エーデル」にいた彼らが、ベツレヘムで真っ先に、まことの大牧者であり、しかも同時に「傷なき小羊」として死なれる幼子イエシュアを礼拝したことは、神の救いのドラマにおける驚くべき啓示だったと言えます。

●イスラエルにおいては、羊飼いは必ずしも身分の低い見下げられた職業ではありません。イスラエルの歴史において登場する人物はみなすばらしい羊飼いでした。アベル、アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、ダビデなど、彼らはまさに羊飼いであり、人々から尊敬されていた指導者でもありました。良い羊を育てることは、良い羊飼いしかできません。「ミグダル・エーデル」の羊飼いたちが、やがて真の良い羊飼いとされるイエシュアとベツレヘムにおいて合流しているのは、神のドラマにおけるすばらしい啓示です。それに加えて重要なことは、そのベツレヘムがイスラエルの王となったダビデの登場する町だったということです。

#### 4. ダビデの町ベツレヘム

●聖書では、「ダビデの町」という表現が、ダビデが生まれ育った場所としての「ベツレヘム」を指す場合と、ダビデが神の都として選んだ「エルサレム」を指す場合とがあります。今回は前者の意味で取り上げています。ダビデはユダのベツレヘムのエフラテ人でエッサイという名の人の息子でした(8人の息子の末っ子)。琴が上手な音楽家であり、かつ勇士であり、戦士です。ことばには分別があり、体格も良い人でした。そして重要なことは、ダビデが父の羊を飼う羊飼いであったという事実です。預言者サムエルはこのダビデに王となるべく油を注ぎました。ダビデはベツレヘムにおいて父の羊を飼う羊飼いの働きをすることによって知らず知らずのうちに、やがてイスラエルの理想的な王となるべく訓練を受けていたのです。

●イスラエルにおける理想的な王とは、「神の代理としての王」です。しかも「牧者の心をもった王」でなければなりません。ダビデはまさにそのモデルでした。しかし、王制を導入したイスラエルの歴史において立てられた多くの王たちが、神の代理であることを忘れ、同時に、牧者の心を失っていきました。そのために、ダビデから千年後にダビデの町ベツレヘムに、ダビデに勝るところの真の王であり、永遠の大牧者となられるイエシュア・メシヤ(イエス・キリスト)が生まれることになるのです。そしてその永遠の大牧者、真の王は「わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のあるものをかづける。・・・わたしは正しいさばきをもって彼らを養う」という神の約束を実現してくださるのです。

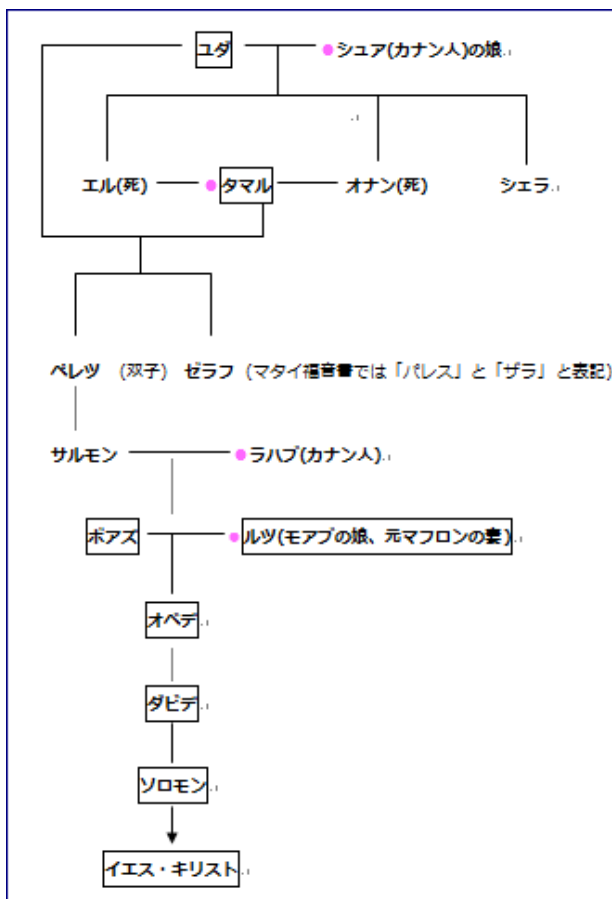
#### 5. ベツレヘムとルツ記物語の預言的啓示

●ルツ記は、ベツレヘムに住む一つの家族が、飢饉という神のさばきによってベツレヘムからモアブの地に逃れ、やがて飢饉が終わって故郷のベツレヘムに戻って来たという物語です。そのとき戻って来たのは、ユダヤ人のナオミと異邦人ルツの二人でした。息子の嫁ルツが姑ナオミに「すがりついた」ことで、ユダヤ人のナオミに子孫ができ、そこからダビデが生まれ、イエシュア・メシア(イエス・キリスト)が生まれてくるのです。そのためにはルツが子を産まなければなりません、子を産む前に異邦人のルツがユダ族につながる者と結婚しなければなりません。そこに神の不思議な物語があるのです。ルツがだれと結婚したかと言えば、ベツレヘムの有力者であり、ナオミとルツを「贖うことのできる資格を持つ人」(「ゴーエール」<sup>כֹּהֵן</sup>)のひとりであったということです。ベツレヘムでのボアズとルツの出会いが単なるロマンスとして描かれているのではなく、ユダヤ人が異邦人の助けによってその子孫につながるという深い神のご計画が秘められているのです。

●「ルツ記物語」が、異邦人(しかも、ルツはモアブ人)とユダヤ人が密接な関係をもったこと、この二つの関わりを正しく理解することなくしては、神の救いのご計画を正しく理解することはできません。しかもこの二つの関わりがなければ、神のご計画が完成しないことを啓示している書だからです。聖書においてはユダヤ人と異邦人という区別しかありません。つまり、ユダヤ人以外のすべての民族は、イスラエル民族という仲介者を通してのみ、真の神とかわりを持つことができるように神が定められたからです。使徒パウロがエペソ2章で用いている「新しいひとりの人」(One New Man)という概念は、異邦人とユダヤ人がひとつになっている実体(リアリティー)です。神が選ばれたイスラエル民族、ユダヤ人は今なお神から捨てられてはおらず、やがて彼らも救われるのですが、終わりの日が近づけば近づくほど、この両者の関わりとしての「新しいひとりの人」という聖書的な教会像がより重要になってくるのです。そのことが「ルツ記」の中にすでに啓示されているのです。

●不思議なことに、ユダ部族の系列には、異邦人がその系列をつなぐために用いられていることが理解できます(右図●を参照)。異邦人のルツがすがりついたことでユダヤ人のナオミが助けられたように、両者は共に神からの「共同相続人」とされるのです。

●今日のキリスト教会は、ユダヤ人のナオミに背を向けた「オルパ」になるか、それともナオミに「すがりついて」一体となった「ルツ」になるか、その選択が問われているように思います。





## ベアハリート

●今回のメッセージは、「ベツレヘム」というヘブル語が意味していること、そして「ベツレヘム」を中心として、さまざまな出来事が密接な関連性をもってつながっていることを思い巡らしました。大自然のすべての存在が独自で存在することなく、すべてが何らかのつながりをもって存在しているように、神のドラマのすべての事柄がどこかと密接なつながりをもってしているのです。ただそれが隠されているので、そのつながりの豊かさを私たちはなかなか見出し得ることができないのです。知り尽くしがたい、計り知れない神の知恵が聖書の中に隠されています。そしてそれを捜し、尋ね求めようとする者には、神がその隠されたつながりを聖霊によって私たちに教えてくださるのです。そのことを知ることを通して、歴史に働く神の主権性をますます確信できるようになるのです。

2016.11.06